

[課題演習概要]

STEP モデルを活用した自立活動の実践的研究

—情緒学級児童の生涯スポーツの実現を目指して—

堀 雅人

Hori MASATO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

初等教育高度実践力特別プログラム

(2024 年 1 月 10 日受理)

キーワード：生涯スポーツの実現，STEP モデル，質的研究，人間関係の形成，情緒障害

1 研究の目的

本研究は，情緒学級において STEP モデルを活用した自立活動の実践を通して，生涯に渡ってスポーツに親しむ素地がいかに育ちつつあるかを子どもの具体的な姿で示すことを目的とする。

2 研究の計画

MS2 前期	体育学習における「非認知能力」向上のための先行研究調査
MS2 後期	「マット運動」における非認知能力に焦点を当てた実践と分析
MS3 前期	「STEP」モデルに関する先行研究調査
MS3 後期	STEP モデルを活用した「マット運動遊び」の実践と分析

3 研究の内容

(1) 先行研究

Black&Stevenson (2011) は，STEP モデルの効果について，「空間」「課題」「用具」「人」に関する配慮・支援を適切に行うことが，障害の有無に関わらず生涯スポーツの実現を目指した体育の実践において重要であることを述べている。草野 (2007) は，体育学習の中で，障がいの有無に関わらず全ての児童が同じ空間で学ぶことが難しい理由として障がいの有無によって生じる「能力差」をあげ，技能向上を軸とする

段階的な支援を効果的に行うことがインクルーシブ体育の実現に向けて有効であると述べている。加藤 (2020) は，特別支援学級に在籍する児童を対象にスポーツ教育モデルを用いた技能向上に関する研究を行っており，その中で通常学級の児童が特別支援学級の児童へ助言，アドバイスを効果的に行うことで技能が向上することを明らかにしている。澤江 (2020) は，自閉症，情緒障害特別支援学級の児童に対して，よりよい人間関係の構築を目指した体育の実践を行っている。課題の設定，場の設定に関する効果的な支援を行うことで，児童の活動量が増え，他の児童との関わる機会が増えることを成果として示している。

しかしながら，先行する実践のほとんどが課題や場の設定を中心に支援を行うものであり，「人との関わり」の支援に焦点化した研究はあまりみられない。したがって，STEP モデルを活用し，人間関係に関わる支援や子どもの学びのありようを質的に検討し生涯にわたってスポーツに親しむ素地を育成する授業実践研究を行う。

(2) 授業実践

単元名	マット運動遊び
実践日	令和5年11月22日
主眼	「器械運動（マット運動）」において，友だちの気持ちを尊重したり，自分の役割を果たしたりしながら仲良く活動することができる。

(3) 実践（授業分析）考察

人物	行動・発言(中略)
K112	(交流学級 0 児のシュートが失敗) あー惜しい。いいよもう一回。ボールはい。
K113	いけ。ナイス。
K114	(ボールを取りに行く) ちょっとまって。はいボール。
O115	(友だちがシュートを失敗して) あっ。
K119	あー。もう一回いけもう一回。

上記の場面では、K 児は「平均台コース」の平均台の上に乗ってのシュートに失敗した交 0 児に対し「あー惜しい。いいよもう一回。ボールはい。」(K112)と発言している。もう 1 度シュートの機会をつくったことは K 児が 0 児の「失敗してしまった」という気持ちに対して思いやった行動であろう。些細な場面であるが、前期実践の際に、ゲームに失敗して感情を抑えることが困難であった K 児が、友だちが楽しむための声掛けをすることは、STEP モデル（人間関係への支援）を通して運動・スポーツを親しむ素地が育ちつつあると解釈できる。

人物	行動・発言(中略)
K179	(合図係を) ねえおれがやる。
K180	ねえ、I ちゃん
K181	どうぞ、(合図をする。)
K183	ねえこれをみて笑顔になって。(旗を見せて笑わせる)
K189	ちょっとストップね。(マットをなおす)
K192	はい次いいよ。ルールをまもってください。どうぞ。

この場面は、このプロジェクトの主催者である K 児が、運動中に自発的に役割をこなす場面である。具体的に K179 では、「とびばこコース」において、スタートの合図をする児童 I に対して、役割を変えようと声掛けをする様子である。これは決められていた役割ではなく、I 児の気持ちを察しての発言である。さらに K183 の「ねえこれをみて笑顔になって。」という発言では、自分の役割を果たしながらも、交流学級の児童を楽しませようと盛り上げる言動であり、K 児にとって STEP モデルの P（人間関係）が活動を楽しむ契機をつくり、運動に多様に親しむ素地が育ちつつあることが推察される。

人物	行動・発言(中略)
I33	(クラスの児童を集めるために) 集合。
I34	(全体集合の場で前に立つ)
Q35	色々なところで色々な人たちががんばってくれていたの、みんなのために頑張ってくれて嬉しいなと思いました。
I36	(児童の感想に対して笑顔で拍手)

この場面は、このプロジェクトの主催者である I 児が、自身の役割を果たし全体集合をさせた後 (I33)、児童 Q の「嬉しい」という感想を聞いて笑顔で拍手をする場面である (I35)。交流学級での学習にあまり参加できていなかった I 児が、学習を通し運動を「支える」活動を中心に自分の役割を果たし、友だちの感想を聞いて笑顔を見せている。これは STEP モデル（他者との関わりを楽しむ）がきっかけとなり、学習に主体的に参画した姿であり、生涯スポーツの実現に向けて、運動への多様に関わる素地が育ちつつあると解釈できる。

4 成果と課題

○これまでの学校生活で応援されたり励まされたりしてきた情緒学級の児童が、プロジェクトの企画・運営の主体となったことにより、児童の自立が促されたことが明らかになった。

○STEP モデルを活用した学習を通して、学習を運営するだけでなく、他者と関わりながら運動を楽しむ生涯に渡ってスポーツに親しむ素地が育ちつつあることが明らかになった。

●STEP モデルの人間関係への支援だけが、児童を楽しませるきっかけになったのかは不明である。実践の成果は、場や課題設定の組み合わせにも考慮すべきであり、今後 STEP モデルの相互の関係を精緻に検討する必要がある。

●抽出児が交流児童と良好な関係を築いており、STEP モデルの効果が本当に有効であったかを判断することが難しい。今後、多様な児童との関わりみとすることで、P（人間関係）への支援の有効性を検討していく必要がある。

主な引用・参考文献

- 澤江幸則 (2020) インクルーシブ体育の可能性と限界 P33-38
- Black & Stevenson (2011). Reproduced by permission of Ken Black, inclusion advisor, Youth Sport Trust International founding director
- 加藤達郎 (2020) 特別支援学級に在籍する児童が参加する体育に関する研究
- 野村勝彦 (2020) インクルーシブ体育に関する実践的研究 実践的研究 教職実践センター紀要 第 8 号